



初級の授業で文法をとりあげると、しばしば退屈で、つまらなくなりがちです。今回は、動詞の活用形の学習を例にして、楽しく学ぶためのヒントを紹介します。



なまえ

家族さがし

目的・教えること
「て形」(te-form)の導入。「て形」の作り方のルールを教える前に、「て形」の形のグループがいくつかあることを学習者自身に気づかせる。
学習者のタイプ
初級。こどもから大人まで。
クラスのタイプ
何人でもできる。
準備するもの
マグネット・シート (またはカードとマグネット)。

方法

●準備

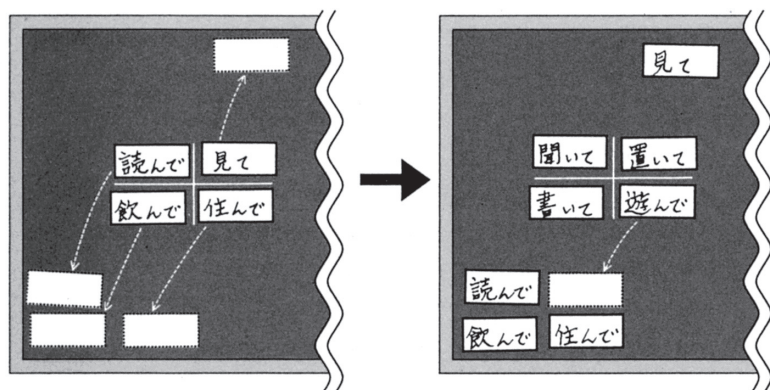
マグネットシートまたは紙のカードをたくさん準備して、いろいろな動詞の「て形」を書いておきます。できるだけ習った動詞を使いますが、グループが作りやすいようにまだ習っていない動詞を入れてもかまいません。

●教室で

- 準備した「て形」のシートを黒板に4枚はります。その時、1枚だけは形のグループの違う「て形」にして、あとの3枚は同じものにします。このような「形のグループ」をこの教室活動では『家族』と呼ぶことにします。

例) [読んで] [飲んで] [見て] [住んで]

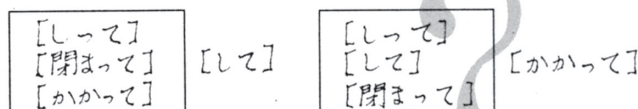
図1



- 学習者に1枚だけ形の違う動詞を見つけてさせます。
 - [見て]が見つかったら「～んで」の家族3枚と離して、黒板の別の場所にはりなおしてください。
 - そして、また次の4枚を示して、家族に入らない1枚をさがします。
- 例) [書いて] [遊んで] [置いて] [聞いて]
「～いて」の家族とそうでないもの [遊んで] が見つかりました。[遊んで] は前に作った「～んで」の家族に入りそうなので、そこに入れてみましょう。
- 何回か繰り返して、いくつかの「て形」の家族を作ってください。

注意: 学習者が自分で見つける作業が大切です。学習者は家族さがしのとちゅうで、いろいろなグループ分けを見つけてしまうかもしれません。たとえば、例の4つの動詞からは「～って」の家族も、「し」ではじまる家族も考えられます。

図2 例) [しって] [して]
[閉まって] [かかって]



どちらも正しいのですが、学習者に気づかせたいのは「～って」の家族です。早く家族を見つけてほしい時は、答えがわかりやすいような組み合わせを考えて準備してください。学習者がいろいろな答えを考えながら、「て形」の形によるグループ分けがあることに気づくことが目的です。「来る」「行く」など、不規則 (irregular) 動詞をその場ですぐに説明する必要はありません。

応用

だいたいグループ分けができたらそれぞれの動詞の「辞書形」や「ます形」など学習者がすでに知っている形を思い出させてみましょう。活用形の規則に気づかせることができます。この時に不規則動詞を見つけることもできるでしょう。

カードの動詞はひらがなで書いてもかまいませんが、「きて (来て/着て)」・「よんで (呼んで/読んで)」のような動詞はひらがなだけではわかりませんから、漢字を使うか、意味がわかるような工夫をしてください。

アイデア提供: 坪山由美子 (日本語国際センター日本語教育専門員)

執筆: 荒川みどり (日本語国際センター日本語教育専門員)

なまえ 1秒…2秒…3秒…!

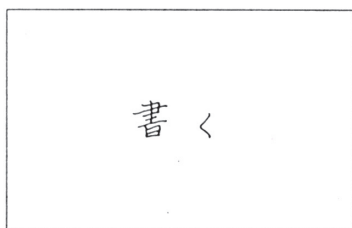
もくてき おし 目的・教えること
どうし 動詞のいろいろな形を正しく覚えるための練習。
がくしゅうしゃ 学習者のタイプ
しょきゅう しょうがくせい こうこうせい 初級。小学生から高校生まで。
クラスのタイプ
ふたり い じょう ふたり 2人以上（2人ずつのペアでやるが、4～5 人の小グループでもできる）。
じゅん び 準備するもの
はがき よりも 少し 小さい カード。

方 法

●準備

- 1) 教師は、1枚のカードに1つずつ、これまでに学習した動詞を書きます。このときの形は、学習者が最初に習った形や一番よく覚えている形がいいでしょう。
- 2) カードの裏には、学習させたい活用形やそれらの形を使った表現を書きます。図3のように活用形以外のところは下線を引いてください。1回のゲームでは3～5種類くらいがいいと思います。

図3 表



裏

- ① 書かないてください
- ② 書きます
- ③ 書くことができます
- ④ 書いたことがあります
- ⑤ 書いています

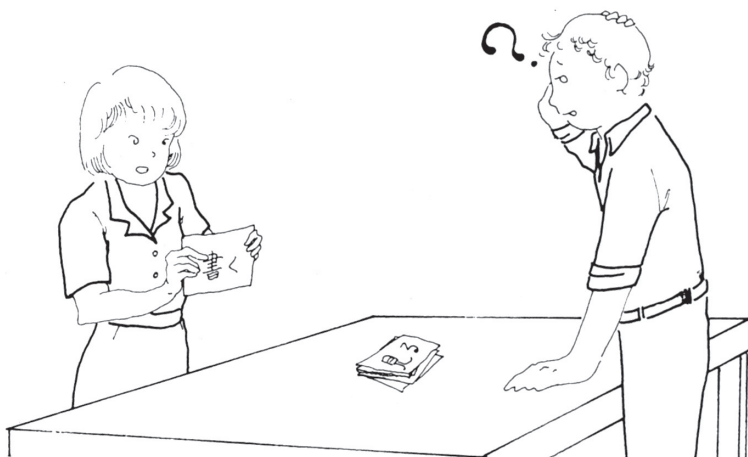
●教室で

- 1) カードの表を上にして、重ねて置きます。
- 2) Aさんが一番上のカードを取って、そのカードの表をBさんに見せながら、下線のところだけ読みます。Bさんは3秒以内に表の動詞の形を変化させて答えなければなりません。
例) A「ないでください」 B「書かないでください」
A「ます」 B「書きます」
これを①から⑤までやって、正しく言えた数だけ点がもらえます。①→⑤の順番を変えてもかまいません。3つ言えたら3点です。正しくない場合は点になりません。3秒以上かかっても点になりません。（学習者に合わせて、答える時間は変えてもかまいませんが、あまり長くしない方がいいでしょう）
- 3) 次のカードはBさんが取り、Aさんに表を見せて、同じようにします。3人以上の場合はカードを取る人と答える人を順番に回します。
例) 3人の時：AとB → BとC → CとA …
- 4) このように順番にカードを取って質問を出し合います。最後にたくさん点をもった人が勝ちです。

注意：このゲームはことばの形を覚える練習で、学習者が意味を考えなくてもできます。練習する動詞の意味や形によっては使えない動詞もありますから、教師は準備するときに気をつけてください。

- 例) できる → ×できません
見える → ×見えます

執筆：北村武士(日本語国際センター日本語教育専門員)



今回のヒントはいかがでしたか。外国語学習が初めての場合、とくにこどもの学習者の場合には、言語には『文法』があることさえ意識していないこともあります。「家族さがし」のような教室活動はそのような学習者のためにも、また与えられた知識を暗記するだけの授業をさけるためにも役立つのではないのでしょうか。

このコーナーの担当：荒川みどり